

もう一つの薬学会と東京薬学新誌

薬学雑誌 1910年度(第340号) C1-3

先月、先々月と薬学会の起源について考察した。ところで、明治13年(1880年)以前にも「薬学会」があった。これも下山、丹波、丹羽が中心となっている。明治11年3月に第一回生として卒業し、母学に残った彼らは、在學生、教員、学外の賛助者を加えて毎月勉強会を開いていた。そして同年11月、「薬学会」を結成、「東京薬学新誌」を発行する。しかし資金難から明治12年11月発行の7号で廃刊、同時に「薬学会」は解散した。この時のメンバーには、柴田承桂、大井玄洞、飯森挺蔵、熊沢善庵、松原新之助ら教官も含まれ、全51人である。翌13年1月の30人で始めた親睦会的集会よりも、ずっと薬学会らしい。中心となっていた下山はじめ、多くの会員が共通しており、雑誌廃刊から親睦会の新年会まで1、2か月足らずなのだから、明治13年創立とする薬学会は、明治11年から連続しているようにも見える。しかし現在の薬学会が、学問的大志を抱いた11年の学術結社よりも、たまたま開いた13年の親睦新年会の方を起源としたのは、先月述べたとおりである。

ところで、第一次薬学会が発行した「東京薬学新誌」は、順天堂医事雑誌(1875)、東京医事新誌(1877)に続いて1878年に創刊された。医薬系雑誌としてはかなり古い。残念ながらネットで見られず、現物は東大薬学部にもない。金沢大、東北大、京都・日本文化研究センター、内藤記念くすり博物館などにはあるようだ。関東の人なら東大法学部附属の明治

新聞雑誌文庫に行くと手に取って見られる。

ちなみに明治12年1月発行の第3号を見てみる。裏表紙うらに「社員」全員51人の名前がある。社はSocietyの訳だ。会員即出資者という状況であった。表紙を入れて32ページ、両面印刷ではなく2つ折にして綴じている。

第三号目録

○薬学会記事

紫根の試験

有機酸分別の論

栄養論

キハタと黄檗と異なるの説

○中外抄譯

癩病「レブラ」に「グルコン油」の寄効ある説

日本酒製造法並びに酒母分析実験説

酒の説 ヲスカルコルシエルト氏著

○投書

毒蛇咬傷治験

東京薬学新誌は、表紙に毎月2回発行とあるが月1回であった。定価7銭5厘。府内12冊分前金69銭、24冊1円33銭と、長期契約の割引料金まで示していたが、第7号で廃刊となった。

小林 力